

地域ベ平連研究の現状と課題

Recent Trends in the Research on Local Beheiren

Movements in Japan

黒川 伊織

Iori KUROKAWA

I はじめに

1965年2月、アメリカ軍による北ベトナム爆撃（北爆）がはじまった。当事国であるアメリカはもとより、世界各地で、アメリカ軍の蛮行に対する抗議の声がわきあがった。日本では、1965年4月24日、東京・清水谷公園で開催された抗議デモが、「ベトナムに平和を！市民文化団体連合」（ベ平連）による最初の運動とされる。しかし、1945年9月の連合軍の進駐以来、1965年の時点でも神戸港第6突堤や六甲山頂がアメリカ軍により接收されていた神戸では、いわゆる「ベ平連」によるデモに先立つ半月前の4月6日、当時三宮にあった神戸アメリカ領事館前で、北爆に抗議する市民の座り込みがはじまり、8日までに15人が逮捕される事態が起きていた。

後述するように、ベトナム反戦運動というと、担った人びとの多くが知識人であった点や、遺された史料の厚みという点から、作家・小田実を中心とする東京ベ平連の運動に関心が収斂しがちなのであるが、しかし、各地で多様な人々が、地域の課題と切り結びながら主体的に運動を展開していったことは、日本における社会運動史の歩みのなかで、特筆すべき事柄である。既成の組織や政党とは無関係、あるいは距離を置いていた人々が、「ベトナムに平和を！」というシングル・イシューのもと結集し、ともに運動を担うことなど、それまでの社会運動の経験のなかではあり得ない出来事であった。

近年、世界的にはパリ5月革命などに象徴され、日本では日大闘争・東大闘争などの学生「叛乱」に象徴される、「1968年」における社会運動の高揚に関心が強まっている¹。そのような研究動向のなかで、昨年10月には、東大全共闘議長であった山本義隆氏が自叙伝『私の1960年代』（金曜日）を刊行し、彼ら／彼女らの担った運動がベトナム反戦運動か

¹ 岡本宏『「1968年」—時代転換の起点』（法律文化社、1995年）、絳秀実『1968年』（筑摩書房、2006年）、小熊英二『1968』（新曜社、2009年）のほか、高草木光一編『1960年代 未来へつづく思想』（岩波書店、2011年）、油井大三郎編『越境する1960年代』（彩流社、2012年）など参照。

ら全共闘運動へと展開するさまを当事者の視点から提示した。また、ベトナム反戦運動・学生運動を高揚させる契機となった1967年10月の第1次羽田闘争で命を落とした京都大学生・山崎博昭氏を顕彰するプロジェクトも、実兄の山崎建夫氏らの尽力により動き出している（「10・8山崎博昭プロジェクト」<http://yamazakiproject.com/>）。

現在、筆者は、国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）での共同研究「『1968年』社会運動の資料と展示に関する総合的研究」（2015～2017年度）に共同研究員として参加しており、主としてベトナム反戦運動の経験と学生運動の経験を切り結ぶことで、「1968年」が孕んだ可能性を検証しようとしている。そこで、本稿では、ベトナム反戦運動に関する研究史を整理したうえで、神戸において主に学生を担い手として展開されたベトナム反戦運動に関する資料の収集状況を紹介することで、今後のベトナム反戦運動研究、そして「1968年」研究が進むべき方向性を考えていくことにしたい。

II 地域ベ平連研究の深化と課題

2.1 地域ベ平連に関する先行研究

「ベ平連」と言うとき一般に想起されるのは、前述したように、作家・小田実らが結成した東京のベ平連（以下、東京ベ平連）の活躍であろう。東京ベ平連は、1974年の解散直後から、『資料「ベ平連」運動』（河出書房新社、1974年）や『ベ平連ニュース縮刷版』（ベ平連、1974年）などを刊行して自らの経験を社会に積極的に発信するとともに、当事者による回顧的記述を多く発表してきた²。そのため、「ベ平連」と言うと、この東京ベ平連の運動に関心が収斂しがちであるが、しかし、ベ平連とは「広義には…全国各地のベトナム反戦運動の総称。これらの運動体はそれぞれ自立したものであって、狭義のベ平連（東京ベ平連一引用者）に加盟していたわけでも、また支部でもなかった」³と記されているように、各地のベ平連はさまざまな担い手により独自の活動を行っていた。

このようなベトナム反戦運動の地域的多様性に関心が向けられる重要な契機となったのは、2003年、歴史学研究会大会現代史部会のテーマとなった「ヴェトナム戦争と東アジアの社会変容」で平井一臣が行った報告「ヴェトナム戦争と日本の社会運動—ベ平連運動の地域的展開を中心に」⁴である。平井は、当時埼玉大学共生社会研究センターに保管されていた、東京ベ平連の事務局長・吉川勇一旧蔵のベ平連史料⁵を用いて、各地域で独自に展開されたベ平連運動（以下、地域ベ平連とする）についての報告を行った。これを画期とし

² 近年発表されたものでは、高橋武智（聞き手・岩間優希）「越境による抵抗、あるいは抵抗のための越境」（『アリーナ』19号別冊、2015年所収）、吉川勇一「原水爆禁止運動からベ平連へ」（前掲『1960年代 未来へ続く思想』）などがある。高橋は、JATEC（脱走兵技術委員会）を担い、2015年春に逝去した吉川は東京ベ平連の事務局長を務めた。

³ 「はしがき」『ベ平連ニュース』（縮刷版）、1974年所収。

⁴ 本報告をもとに、平井は「戦後社会運動のなかのベ平連」『法政学会』（九州大学法政学会）71巻4号、2005年を公表している。

⁵ 現在、それら史料は、立教大学共生社会研究センターに移管され、順次開架書架での公開が進みつつある。史料の来歴・概要については、平野泉・高木恒一「市民アーカイブズとアカデミズム」（『アリーナ』19号別冊、2015年所収）参照。

て、歴史学・社会学の分野から地域ベ平連の研究にアプローチがはじまったのである。

地域ベ平連の研究に関する具体的な事例としては、千葉ベ平連・埼玉ベ平連に関する研究報告⁶、福岡ベ平連に関する論文⁷、広島・岩国ベ平連に関する研究報告⁸、沖縄ベ平連に関する研究⁹、そして筆者によるベ平連こうべについての研究¹⁰がある。また、近年の総論的研究としては、道場親信の研究があり¹¹、これら研究者や運動を担った当事者により、「地域ベ平連研究会」(<http://chiikibeheiren.jimdo.com/>)が2013年に発足している。

以上のように、地域ベ平連研究は、この数年急速に拡大しつつあるのであるが、研究を進める際に大きな課題となるのが、史料の発掘という問題である。北爆開始から50年、ベトナム戦争終結から40年が経った現在、運動を担った人びとの多くは、転居や老前整理のため史料を処分している。筆者がフィールドとする神戸では、1995年1月の阪神・淡路大震災によって自宅が全壊し、大切にされてきた史料を失った人々も多くいらっしゃる。当事者の多くが70代に入ろうとするなか、早急に史料を発掘し整理したうえで、しかるべき機関で保全する必要があるのが現状である¹²。

本稿で後述するように、各地のベ平連は、自らミニコミを発行して、東京ベ平連をはじめ、全国各地のベ平連にミニコミを送付してネットワークをひろげた。その意味で、ひとつの地域ベ平連の史料を分析すると、芋づる式に他地域の地域ベ平連の情報がわかる場合が多い。筆者がこのことに気付いたのは、ベ平連こうべが発行するミニコミの発行元となっていた「アンボ神戸社」旧蔵史料に出会ったことだった。

2.2 「アンボ神戸社」旧蔵史料について

「アンボ神戸社」旧蔵史料は2012年9月、神戸市在住の髯本郁（はしもと・かおる）氏（1953年～）より筆者が研究のためお借りし、現在筆者の自宅で保管しているものである。兵庫県立長田高校で高校全共闘を経験した髯本氏は、1972年に神戸大学に入学して、大学生協の活動に関わる一方、1969年10月に神戸大学学生会館を拠点に結成された「ベ平連

6 相川陽一「ベ平連運動における地域との出会い—『千葉ベ平連』および『埼玉ベ平連・浦和市民連合』を手がかりにして」、同時代史学会2009年度大会報告。

7 市橋秀夫「日本におけるベトナム反戦運動史の一研究—福岡・十の日デモの時代(1)」『日本アジア研究』11号、2014年3月。同「日本におけるベトナム反戦運動史の一研究—福岡・十の日デモの時代(2)」『日本アジア研究』12号、2015年3月。

8 木原滋哉「反戦・反核・反基地—広島・岩国ベ平連の場合」、日本平和学会2011年度秋期研究集会報告。

9 大野光明『沖縄闘争の時代—1960/70』人文書院、2014年。

10 黒川伊織「神戸におけるベトナム反戦運動の経験 1965年～1978年—「神戸行動委員会」と「ベ平連こうべ」—」『メディア文化研究』1号、2013年。同「朝鮮戦争・ベトナム戦争と文化・政治—戦後神戸の運動経験に即して」『同時代史研究』7号、2014年12月。同「ベトナム反戦から内なるアジアへ—ベ平連こうべの軌跡」出原政雄編『戦後日本思想と知識人の役割』法律文化社、2015年所収。同「神戸港は南シナ海に通じ、太平洋西岸に通じる—北爆50年の2015年夏、集団的自衛権反対デモの現場から—」『アリーナ』19号別冊、2015年所収。

11 道場親信『占領と平和—戦後という経験』青土社、2005年。

12 北九州では、「北九州国民文化会議」がベトナム反戦運動の重要な担い手となったが、その発行したミニコミは、坂口博氏（火野葦平記念館館長）により発掘、保全されている。

こうべ」の活動に献身した。

1972年4月、「ベ平連こうべ」のミニコミ『週刊アンポこうべ』を発行していた「アンポ神戸社」は、神戸大学学生会館から国鉄三ノ宮駅北の雑居ビルに移転した。『週刊アンポこうべ』は、『アンポこうべ』と改題して1974年末まで発行を継続するが、発行を停止した後も、「アンポ神戸社」の家賃を各メンバーが分担して事務所を維持していた。本史料は、1978年4月の事務所閉鎖の際に、事務所に残っていたビラやミニコミなどを菅本氏が持ち帰り、以降40年近く自宅で保管されていたものであり、その保存状態は極めて良好である。

また、本史料を提供していただいたことをきっかけに、ベ平連こうべのメンバー・橋本宗樹氏（1949年～）が、ご自宅の物置から40年以上前に使用していた「ベ平連」の旗を探し出してくださった（「40年ぶりベ平連の旗」『毎日新聞』2015年6月13日夕刊、web版<http://mainichi.jp/articles/20150613/ddf/041/040/003000c>）。

そして、「ベ平連こうべ」の最後の旗となったそれを縫いあげた守野ゆり子さん（1955年～）にもお目にかかることができ、ともに2015年夏の集団的自衛権行使容認反対デモを歩くことができた。大阪・扇町公園でのデモのさなか、「ベ平連」の旗を見ては「私も昔ベ平連でした」と駆け寄ってこられる方々の姿に、守野さんが「あの時旗に「こうべ」って縫わなくてよかったわ。「ベ平連」だけやから、みんなこんなに来てくれるんやね」とおっしゃっていたことが、筆者の胸に強く刻み込まれている。まさに、「ベ平連」は多様な人びとがシングル・イシューで集うことのできる場であったのだ。各地に叢生したそのようなベ平連の歩みを歴史に刻むためにも、早急に関係史料の整理・分析を進める必要がある。

本史料については、2016年度より大阪産業労働資料館（エル・ライブラリー）を拠点に目録化の作業を進めていくことになっている。その作業に先だって、本稿では、各地のベ平連に関わった人々からの情報提供を求めるために、本史料の概要を大まかに示しておくこととしたい。なお、「ベ平連こうべ」の元メンバーのうち、飛田雄一（1950年～）、堀内稔（1947年～）の両氏も膨大な文書を残している。飛田氏が所蔵する文書類はすべて飛田氏によりpdf化されており、関係者に無償頒布されている。堀内氏所蔵の文書類は、筆者の自宅で保管している。堀内氏所蔵の文書類の概要については、別稿を期したい。

III 「アンポ神戸社」旧蔵史料概要

3.1 「ベトナム通信 '65・9月～ [ベトナムに平和を！神戸行動委員会]」（B5版）

本ファイルは、1965年4月6日夕方、神戸三宮の旧居留地にあった神戸アメリカ総領事館前で、北爆に対する抗議の座り込みを実施した人々を母体に発足した「ベトナムに平和を！神戸行動委員会」が発行したミニコミ・連絡ハガキによって構成されている。確認できる限り最も日時の古いものは、1965年9月26日付で発行された「9月行動委員会通信」第1号である。1965年中に発行されたミニコミは、すべて当時甲南大学理学部の教員であり、のちに救援連絡センターを設置する物理学者の故・水戸巖氏と、現在も反原発運動の先頭に立って活動を続けておられる妻・喜世子氏の自宅を発行元としている。

1966年1月以降は、当時神戸大学教養部の教員であった仏文学者・小島輝正氏の研究室を連絡拠点として、『ベトナム通信』の発行が続けられた。1969年夏の41号を最後に停刊

し、10月1日からは「アンポ神戸社」が発行する『週刊アンポこうべ』が発行されることになる。『ベトナム通信』のうち現存するものは、約3分の1に過ぎないが、その誌面からは、停滞していたベトナム反戦運動が、1967年10月の第1次羽田闘争の衝撃を受け再び高揚する過程を、強い衝迫感をもって感じられる。

「ベトナムに平和を！神戸行動委員会」は、神戸港第6突堤が米軍に接収され、川崎重工業・新明和工業など阪神間の大手工場が米軍の軍需品調達工場となっていた現実に向き合い、三宮での定例デモと並行して、第6突堤や各軍需工場への抗議行動も実施していた。

「ベトナムに平和を！神戸行動委員会」に関しては、筆者はある程度詳説してきた。今後は、本会の実務のほとんどを担い、のちには脱走米兵を神戸で匿うことにもなる齊藤威氏からの聞き取りと、関係する史料の調査を進めることで、より多面的な活動の実態を明らかにしていきたいと考えている。

3.2 「週刊アンポこうべ」(B5版)

本ファイルには、1969年10月から1971年にかけての『週刊アンポこうべ』が綴じ込まれている。『週刊アンポこうべ』の定期購読者は300名、他700部あまりを三宮の街頭で売りさばっていた。1969年10月に発足した直後の「ベ平連こうべ」そして、彼ら／彼女らの活躍の場となった神戸・三宮の風景は、次に引用する図6から、生き生きと甦ってくる。

手書きの図6は、国鉄三ノ宮駅から元町駅までの神戸中心街の姿が、上が海側(南)、下が山側(北)に描かれている。彼ら／彼女らのたまり場であった神戸市役所北の花時計前には、ギターを抱えた「フォークモグラ」の姿がある。デモのコースが描かれるなど硬派な側面を見せる一方、飲食店やボーリング場、パチンコ店などの名も描かれていることから、1970年当時の神戸での学生生活の一端をうかがうことができるだろう。

この時期の「ベ平連こうべ」の特徴は、入管闘争への積極的関与にある。そのきっかけとなったのが、京都ベ平連の飯沼二郎氏が、神戸入国管理事務所に收容されている韓国人・任錫均の救援に取り組むために、「ベ平連こうべ」のメンバーに声をかけてきたことだった。その後、「ベ平連こうべ」は、朝鮮戦争で離散し北朝鮮で暮らす両親の元へ向かおうと日本に亡命してきた韓国人兵士・丁勳相の救援運動に取り組んだ(当時丁は、神戸入国管理事務所に收容されていた)。丁は1970年12月、北朝鮮に出国した。丁勳相をはじめ、脱走韓国兵に関する研究を進めている権赫泰氏(韓国・聖公会大学教授)によると、北朝鮮に渡った丁勳相は金日成により「丁勳山」という名を与えられ、今も存命ということである。

3.3 「週刊アンポこうべ(71~)」(B5版)

本ファイルには、1971年7月発行の『週刊アンポこうべ』72号から、1978年4月発行の100号(最終号)までが綴じ込まれている。1973年以降は、三菱一株反戦運動、三里塚闘争、金芝河救援運動など、誌面はメンバー各々の関心によって構成されている。とりわけ、女性メンバーがリブの高揚を受けて、運動が内包する女性差別の構造に反旗を翻すさまは、戦前以来の日本の社会運動が抱え込んできた「階級的解放」至上主義の問題をそのまま反映していると見てよい。「ベトナムが解放されても女性差別は残る」という女性メンバーと、「階級的解放が実現すれば女性差別はなくなる」と主張する年長の男性メンバーの

意識の懸隔はあまりにも深かった。

その他、本ファイルには、『六甲通信』(1969年10月)および『しんだい週刊アンポ』(1969年11月)が、それぞれ1号のみ綴じ込まれている。これらの史料は、神戸大学闘争が終焉を迎えた(1969年8月教養部封鎖解除)のちに、現状に不満を抱くノンセクト学生をベトナム反戦の旗の下に再集結させようとしたものであるかも知れない。

3.4 「アンポ社・ベ平連」(B5版)

本ファイルは、1972年1月以降、1978年4月に「アンポ神戸社」が解散するまでのさまざまな議事録、メモ、勉強会のレジュメ、会計記録などが綴じ込まれている。そのほとんどが青焼き印刷である。1971年の後半から、ベトナムによるカンボジア侵攻などが生じたことで、そもそもの「ベトナムに平和を！」という課題が不明瞭となった「ベ平連こうべ」は、1972年1月に再建会議を開き、今後の活動方針を話し合った。それ以降の記録が本ファイルには綴じ込まれている。

勉強会のレジュメを見ると、沖縄闘争、狭山闘争などメンバーの関心が拡散していくさまがはっきりとわかる。すでに「ベ平連こうべ」のうち朝鮮問題に取り組む人々は、1970年4月に「むくげの会」を結成していたし、70年安保闘争の敗北、そして、ベトナム情勢の混迷化のなかで、メンバーが苦闘しながら自らの次なる課題を見つけていくさまを、生々しく読み取ることができるファイルとなっている。

また、三宮の「アンポ神戸社」事務所の維持経費を集めるための会計記録も、各自の拠出額とあわせて面白い史料である。当時の事務所賃料は27,500円、その他水道光熱費・電話代を合わせると、毎月3万円程度が必要であったようだ。その3万円を各自で分担して拠出しつつ、6年にわたって事務所を維持し続けたメンバーの努力に、頭が下がる。

3.5 「ベ平連のビラ」(B5版)

本ファイルには、年代・傾向を問わず、雑多なビラやアンケートの類が綴じ込まれている。各種デモへの参加を求めるビラのうち目につくものをあげていくと、入管法再上程反対、三里塚闘争、孫振斗支援、在留資格更新支援、沖縄闘争などがある。

とくに注目すべきは、読者との双方向のコミュニケーションを重視した「ベ平連こうべ」が、街頭での『週刊アンポこうべ』手売りの際に、読者アンケートを手渡していたことである。アンケートの回収率は定かではないが、アンケートの回答が『週刊アンポこうべ』に数号ごとに掲載されていることから、一定の手応えはあったようだ。

3.6 ベトナム戦争の写真類(封筒)(B4版)

B4版封筒に収められている写真類は、三宮センター街入り口などでの、定例の抗議行動の際に、戦火のベトナムの姿を通行人に訴えるために掲げられたものである。当時の雑誌などに掲載された写真を印画紙に引き伸ばしたものが多い。そのほとんどが、ベトナムの戦火の下を逃げ惑う避難民の写真や、まさに出撃しようとする米兵の写真である。

ただし、2枚だけ、日本の警察官を撮影したと思われる写真がある。1969年10月に発足した直後の「ベ平連こうべ」は、三宮花時計前で行動の監視につきまとう私服警官の姿を

撮影した「私服警官写真展」を開催して好評を博した。この 2 枚の写真は、その「私服警官写真展」で展示された写真であるかも知れない。

3.7 「関西ベ平連」「伊丹ベ平連」

本ファイルには、1968 年に発足した「関西ベ平連」のミニコミ（『ベトナムに平和を！関西市民連合通信』『関西ベ平連通信』）・ビラを中心に、関西各地に存在した地域ベ平連の発行したミニコミが綴じ込まれている。以下、そのような地域ベ平連の名称と各ミニコミのタイトルおよび表紙写真をあげておく。

その他、ベトナムに平和を南大阪市民連合（大阪市阿倍野区）が発行したミニコミ『なんだいべ』も本ファイルには綴じ込まれている。

関西ベ平連の文書のなかには、1969 年夏に大阪城公園を会場に開催された「ハンパク」に関する文書も多い。また、東京ベ平連の顔であった作家・小田実が 1969 年 7 月に発表した小説「冷え物」が部落差別を助長するとして問題とされた、いわゆる「冷え物」事件に関する公開質問状（1970 年 12 月 7 日付）も含まれている。関西ベ平連は、発足当初は、大阪市南区（現・中央区）横堀に事務所を構えていたが、1969 年の夏には、大阪市北区葉村町（戦前に水平社が設立されていた）に移転しており、部落問題に対する関心も強かったのかもしれない。「冷え物」事件については、飛田文書にも史料が残っている。関西ベ平連に関しては、複数の当事者と連絡が可能であり、今後聞き取り調査を進めていく予定である。

3.8 「東京ベ平連（のろし）」

本ファイルに綴じ込まれたミニコミの多くは、①脱走兵支援運動に関わるもの、②三菱重工反戦株主会など軍需産業への抗議行動に関わるもの、③反戦自衛官・小西誠氏に関わるもの、④相模原「戦車を止めた四人を支持する会」に関わるもの、⑤その他である。以下にそれぞれのミニコミのタイトルをあげておく。

①イントレピッド 4 人の会『脱走兵通信』（東京都保谷市）

大泉市民の集いバック情報部発行『バック情報』（東京都練馬区）

②三菱重工反戦株主会『のろし』（東京都新宿区）

大泉市民の集い「ソニー・カラーテレビをボイコットしよう」（ビラ、東京都練馬区）

③隊友社『整列ヤスメー自衛官による自衛官の新聞』（東京都新宿区）

④戦車を止めた 4 人を支持する会『戦車を止めた 4 人を支持する会ニュース』（東京都新宿区）

「ただの市民が戦車を止める」会『ただの市民が戦車を止める会ニュース』（神奈川県相模原市）

⑤「ベトナムに平和を！」市民連合『ベ平連ニュース』（東京都新宿区）

『リュウさん・チエさんと「日本人」である私達自由往来を考える会』

兵庫県立須磨高校社会科学部『かまた』（神戸市須磨区）

「うったえー「ほびっと」裁判基金ー（ビラ）」（京都市左京区）

「私たちと戦争」上映の会センター『長編記録映画 私たちと戦争』（東京都練馬区）

以上のうち、東京都新宿区で発行とあるものは、すべて東京（神楽坂）ベ平連事務所を拠点として発行されていたものである。「大泉市民の集い」は、ロシア史研究者・和田春樹氏の自宅を事務所としていた。本ファイルは、1970～72年にかけての東京を中心とする反戦運動に関わる文書を多く綴じ込んでいると見てよい。なお、米軍岩国基地が立地する山口県岩国市にあった反戦喫茶「ほびっと」に関しては、「ほびっと」の実務を担った中川六平による『ほびっと 戦争をとめた喫茶店』（講談社、2009年）に詳しい。

3.9 「京都ベ平連」

本ファイルは、「ベトナムに平和を！」京都集会事務所発行の『ベトナム通信』および、「京都アンポ社」が発行した「ハンパク」開催に関するレジュメにより構成されている。前者の事務局は同志社大学の鶴見俊輔研究室に置かれ、後者は現・京都市会議員（民主党）である鈴木正穂氏が連絡窓口となっていた。1967年2月から1974年10月まで発行された『ベトナム通信』は、座談会「京都ベ平連をめぐって」（飯沼二郎・小田実・北沢恒彦・鈴木正穂・鶴見俊輔）とあわせて、不二出版より1990年に復刻版が刊行されている。

3.10 「グループとも 長野ベ（平連一筆者）・（資料センター）」

本ファイルには、1969年10月に南ベトナム政府より帰国と軍隊への入隊命令を受けたものの、これを拒否して日本滞在を続けた3名の在日ベトナム人留学生の支援に関わる文書が綴じ込まれている。この3名の留学生は、ベトナム平和と統一のために闘う在日ベトナム人の会（ベ平統）を組織してミニコミ『ファ・シェン 破鎖』（東京都板橋区）を発行していたが、その活動が南ベトナム政府の怒りを買って、「兵役は国民の義務」だとして帰国と入隊命令が発されたのである。『ファ・シェン 破鎖』のほか、日本人の支援グループが発行していた、ベトナム留学生支援市民連絡会ニュース編集委員会編『ドン・フォン 東風』（東京都文京区）、京都の「ベトナム人留学生を支援する会」の発したアピールも本ファイルに綴じ込まれている。本ファイルは、入管闘争とベトナム反戦運動の連動を検討するうえで重要な文書群であるといえよう。

3.11 「三文評論・長野ベ平連」

本ファイルには、長野ベ平連機関紙創刊準備号『立つ！』（1968年8月）、長野ベ平連『歩くそして考える』（長野県長野市）のほか、『長野県 上田・飯田・長野・松本ベ平連ニュース準備号』（1968年6月）など長野県下の地域ベ平連が発行したミニコミが含まれる。長野ベ平連は、各地の地域ベ平連や反戦グループ、大学全共闘を結びつける資料センターの設置を構想しており、『資料交換センター通信』（1969年2月）も綴じ込まれている。

これらの文書以上に、本ファイルの中核をなすのは、『三文評論』および『週刊三文評論』である。月刊の前者は同人制をとって活版印刷であるが、速報性を重視する後者はガリ版刷りの小冊子である。両ミニコミは、「ベトナムに平和を！神戸行動委員会」のミニコミ『ベトナム通信』と交換されていたようだ。「ベトナムに平和を！神戸行動委員会」の実務を担

った齊藤威氏（1942年～）宛の送り状が綴じ込まれていた。このとき、齊藤氏は東京大学大学院博士課程に進学して東京に居を移していたが、折を見て神戸に戻り、実務を行っていたのかも知れない。

3.12 「ラッセル平和財団」

本ファイルは、ロンドンで設立された「バートランド・ラッセル平和財団」の活動を日本に紹介するべく、当時長崎大学助教授であった岩松繁俊氏が、1966年9月に自宅に設立した「ラッセル平和財団日本資料センター」が発行したミニコミ『「バートランド・ラッセル平和財団日本資料センター」資料』を中心に構成されている。時期的に、「ベトナムに平和を！神戸行動委員会」と交流を持っていたとみて差し支えない。その他、日本科学者会議内に置かれた「ベトナムにおける戦争犯罪調査日本委員会」が発行した『ベトナム戦犯裁判ニュース』や、長崎県教職員組合『ながさき教育新聞』なども含まれており、被爆者として、そして研究者として長崎の原水禁運動を支えた岩松氏の活動の一端を知ることができるファイルとなっている。

3.13 （無題）（B5版）

本ファイルには、1960年代後半の兵庫県学連・神戸大学学生自治会に関する史料が綴じ込まれている。兵庫県学連の中執は、代々神戸大学の学生自治会が務めていた。神戸大学のなかでは教育学部（現・発達科学部）だけが民青の強い影響下にあったが、1968年頃まで、全学の学生自治会の中執はフロントで占められていた。そのために、兵庫県学連も、フロントの強い影響下にあった。

1968年末から神戸大学住吉寮の寮費問題をめぐって学生と大学側が確執を深めていき、1969年1月には神戸大学の教養部（現・国際文化学部）が封鎖されるに至る。ちょうど、東大安田講堂での攻防戦が続く時であった。本ファイルには、封鎖をめぐる大学側の速報なども綴じ込まれており、須崎慎一神戸大学名誉教授が執筆した「神戸大学紛争」（『神戸大学百年史』所収）とあわせて、神戸大学の学生運動の歴史、そして神戸大学闘争の経験を跡づける重要な史料であると評価できるだろう。

IV おわりに

以上、紹介してきたように、髯本氏が保管されてきた「アンボ神戸社」旧蔵史料には、とくに1969年から70年にかけての時期の関西を中心とする地域ベ平連が発行したミニコミが多く含まれており、その史料的価値は極めて高い。東京ベ平連の事務局長を務めた吉川勇一らの旧蔵史料を保管し、ベトナム反戦運動に関する一次史料を最も豊富に所蔵する立教大学共生社会研究センターにも、本稿であげたミニコミは、ほぼ所蔵されていない。

2015年の初夏から夏にかけて、「ベ平連」の旗とともにデモに出向くなかで、最初にも述べたように、実に多くの方々が「私もベ平連でした」と名乗り出てくださった。そのような方々の多くが、単なるノスタルジーではなく、集団的自衛権の行使容認、そして憲法改正へと突き進む安倍政権に対して、「ふつうの市民」として反対する主体的行動の原点を、かつての「ベ平連」の経験に見出されていた。その限りで、「ベ平連」的な運動のスタイル

は、今なお色あせてはいないのだ。

2016年1月10日、大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスターと青丘文庫研究会（在日朝鮮人運動史研究会関西部会・朝鮮近現代史研究会関西部会）の共催による国際ワークショップが開催された（丁智恵氏（東京大学大学院博士後期課程）による以下のフィールドレビューも参照 <http://media-journalism.org/blog/field-review/308-50>）。

連休中の神戸での開催にもかかわらず、70名以上の当事者・研究者が参加した本ワークショップでは、1968年3月に脱走米兵「キャル」＝フィリップ・キャリコートを京都・竹田の自宅で匿った元放送局カメラマンの小山氏による講演¹³、ベトナム脱走韓国兵と入管闘争について研究する権氏による講演、そして亡命韓国兵・丁勳相の支援運動に取り組んだ「ベ平連こうべ」のメンバーによるリレートークを行った。最後に、第1次羽田闘争で命を落とした山崎博昭氏の実兄・建夫氏より、「10・8山崎博昭プロジェクト」について参加者にアピールをお願いし、会場で多くの賛同者を得ることができた。

日本中に400近くもあったといわれる「ベ平連」、そして「ベ平連」の活動をさまざまなかたちで支えた多様な人々の足跡を今たどり直すには、本ワークショップの開催に象徴されるように、地道なネットワークと信頼関係の構築によって、当事者の方々から史料を提供していただき、経験を聞かせていただくほかないだろう。経験を伺いながらさまざまな人々を結びつけていくこと、その役割を担う者もまた、社会運動の歴史を紡ぎ出しているということを経験に銘じ、今後も粘り強く調査・研究を続けていきたい。

参考文献（発行年順）

- 岡村昭彦『南ヴェトナム戦争従軍記』岩波書店、1965年
開高健『ベトナム戦記』朝日新聞社、1965年
大森実『北ベトナム報告』毎日新聞社、1965年
小田実編『ベトナムのアメリカ人—残虐行為とその意味』合同出版、1966年
小田実『義務としての旅』岩波書店、1967年
ラッセル・バートランド『ラッセル法廷—ベトナムにおける戦争犯罪の記録』人文書院、1967-1968年
小田実、鈴木道彦、鶴見俊輔編『脱走兵の思想—国家と軍隊への反逆』太平出版社、1969年
『資料「ベ平連」運動』河出書房新社、1974年
『ベ平連ニュース』（縮刷版）ベ平連、1974年
『脱走兵通信』（縮刷版）ベ平連、1974年
『ジャテック通信—米軍解体のための時刻表』（縮刷版）ベ平連、1974年

¹³ 2015年1月、小山氏は、「キャル」を自宅で撮影した16mmフィルムの公開に、47年の時を経て踏み切った。以来、関西各地で上映会が行われ、2015年夏には、アメリカで暮らす「キャル」との再会を果たした。これら経緯を記録したドキュメンタリー「わが家にやってきた脱走兵—ベトナム反戦運動 47年目の真実」（毎日放送制作、2015年8月30日放送）は、第70回文化庁芸術祭優秀賞（テレビドキュメンタリー部門）を受賞した（<http://www.mbs.jp/eizou/>）。

ホイトモア・テリー『兄弟よ俺はもう帰らない』時事通信社、1975年
 鶴見俊輔編『帰ってきた脱走兵—ベトナムの戦場から 25年』第三書館、1994年
 関谷滋、坂元良江編『となりに脱走兵がいた時代—ジャテック、ある市民運動の記録』思想の科学社、1998年
 吉野源三郎『同時代のこと—ヴェトナム戦争を忘れるな』岩波書店、1974年
 横内仁司『ドッグ・タッグ—ベトナム戦争日本人志願兵の青春』角川書店、1980年
 小田実『「ベ平連」・回顧録でない回顧』第三書館、1995年
 岡本宏『「1968年」—時代転換の起点』法律文化社、1995年
 ジン・ハワード『アメリカ同時代史』明石書店、1997年
 阿奈井文彦『ベ平連と脱走米兵』文藝春秋、2000年
 鶴見良行『ベ平連』みすず書房、2002年
 安斎育郎『ホーチミン市の戦争証跡博物館ガイドブック』かもがわ出版、2003年
 平井一臣「戦後社会運動のなかのベ平連」『法政学会』71巻4号、2005年
 道場親信『占領と平和—戦後という経験』青土社、2005年
 絳秀実『1968年』筑摩書房、2006年
 高橋武智『私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた…ベ平連／ジャテック、最後の密出国作戦の回想』作品社、2007年
 岩間優希編『ベトナム戦争と日本：1948-2007（文献目録）』人間社、2008年
 中川六平『ほびっと 戦争をとめた喫茶店』講談社、2009年
 小熊英二『1968』新曜社、2009年
 大泉市民の集い写真記録制作委員会『市民がベトナム戦争と闘った—東京大泉・埼玉朝霞：1968-1975：写真記録』梨の木舎、2010年
 吉川勇一「原水爆禁止運動からベ平連へ」（高草木光一編『1960年代 未来へ続く思想』岩波書店、2011年所収）
 油井大三郎編『越境する 1960年代』彩流社、2012年
 黒川伊織「神戸におけるベトナム反戦運動の経験 1965年～1978年—「神戸行動委員会」と「ベ平連こうべ」—」『メディア文化研究』1号、2013年
 市橋秀夫「日本におけるベトナム反戦運動史の一研究—福岡・十の日デモの時代（1）」『日本アジア研究』11号、2014年
 大野光明『沖縄闘争の時代—1960／70』人文書院、2014年
 黒川伊織「朝鮮戦争・ベトナム戦争と文化・政治—戦後神戸の運動経験に即して」『同時代史研究』7号、2014年
 黒川伊織「ベトナム反戦から内なるアジアへ—ベ平連こうべの軌跡」（出原政雄編『戦後日本思想と知識人の役割』法律文化社、2015年所収）
 市橋秀夫「日本におけるベトナム反戦運動史の一研究—福岡・十の日デモの時代（2）」『日本アジア研究』12号、2015年
 山本義隆『私の 1960年代』金曜日、2015年
 高橋武智（聞き手・岩間優希）「越境による抵抗、あるいは抵抗のための越境」（『アリーナ』19号別冊、2015年所収）

平野泉・高木恒一「市民アーカイブズとアカデミズム」(『アリーナ』19号別冊、2015年所収)

黒川伊織「神戸港は南シナ海に通じ、太平洋西岸に通じる―北爆50年の2015年夏、集団的自衛権反対デモの現場から―」(『アリーナ』19号別冊、2015年所収)

※本稿をまとめるにあたっては、飛田雄一氏・中川健一氏・丁智恵氏より写真の提供を受けた。また、ワークショップに参加してくださった元・ベ平連こうべメンバーの室谷圭子さん・守野ゆり子さんをはじめ、すべての皆様方に感謝申し上げます。